



Title	＜翻訳＞サイイド・アブール・アーラー・マウドゥーディー著『イスラーム的民族性の真意』（翻訳および解題）
Author(s)	Maudūdī, Saiyid Abū al-A' lā; 中川, 康
Citation	アジア太平洋論叢. 2001, 11, p. 211-229
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/99966
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

サイイド・アブール・アーラー・マウドゥーディー 著『イスラーム的民族性の真意』（翻訳および解題）

中 川 康*

本稿はサイイド・アブール・アーラー・マウドゥーディー(Saiyid Abū al-A'lā Maudūdī, 1903-1979)の論文『イスラーム的民族性の真意(Islāmī Qaumīyat kā Haqīqī Mafhūm)』の翻訳である。原典は著者の母語であるウルドゥー語で書かれており、彼が当時編集長を務めていた雑誌『クルアーン解釈(Tarjumān al-Qur' ān)』1939年4月号に発表されたものである。

マウドゥーディーはアウランガーバード(現インド・マハーラーシュトラ州)に生まれた。伝統的なイスラーム教育を受けた彼は、家庭の事情によって教育を一時中断せざるを得なくなったものの、アラビア語、ペルシア語、英語を習得してイスラームに関する研究に勤しむ若年期を過ごした。10代半ばには早くもジャーナリズムの世界に身を投じ、17歳にしてウルドゥー語紙『タージ(Taj)』の編集者となっている。1920年代にはデリーに移住し、インド・ウラマー協会(Jam'iyat al-'Ulamā-e Hind)の機関紙であった『ムスリム(Muslim)』、『アル・ジャミーアト(Al-Jam'iyat)』の編集者を相次いで務めた。

『アル・ジャミーアト』を辞してハイダラバードに居を構えたマウドゥーディーは、執筆活動にも精力的に取り組む傍ら、1933年に月刊誌『クルアーン解釈』を創刊した。同誌のトピックはイスラームの基本原則および理念の普及に留まらず、近代西洋とイスラーム世界との対立や当時のインド政治事情等多岐に亘った。マウドゥーディーは現代社会が直面する諸問題の解決には、イスラームの政治および社

* カイデ・アーザム大学国際関係学部博士課程在籍

会原理が実践されねばならないとしてウルドゥー語の洗練された文体を用いて著述活動を行い、インド・ムスリムの啓蒙に努めた。

その後にマウドゥーディーは、当時の代表的なペルシア語・ウルドゥー語詩人ならびに思想家でもあったムハンマド・イクバル(Muhammad Iqbal)の勧誘を受けてパンジャブ州東部のパターンコートに移住、1941年にはラーホールでイスラームによる社会改革を唱えて「ジャマーアテ・イスラーミー(イスラーム党: Jamā‘at-e Islāmī)」を結成し、初代党首(amīr)に就任した。同党は主に学生および社会の中間層の間で支持を集め、パキスタン運動に一貫して反対した。

1947年のインド・パキスタン分離独立直後、マウドゥーディーは活動の本拠をパキスタンに定め、パキスタンにおけるイスラーム国家樹立を目指した。積極的な政治活動を行った彼は時の政権と対立を繰り返した。中でも1953年の反アフマディー暴動(ミルザー・グラーム・アフマドを開祖とする新興のアフマディー教団に対する暴動。教団の開祖を預言者とするカーディヤーニー派はムハンマドを「最後の預言者」と認めないとして他のイスラーム宗教勢力から迫害の対象となっていた)では、『カーディヤーニー問題(Qādiyānī Mas‘ala)』を執筆して民衆を扇動した罪に問われ、死刑判決を受けた(後に減刑、釈放)。ジャマーアテ・イスラーミーは1957年以降、政党としての性格をより強め、マウドゥーディー指導の下、パキスタンの代表的な宗教政党へと成長を遂げた。彼は体調不良を理由に第一線を退く1972年まで党首の座にあり、現代パキスタンの政治において無視できない一定の影響力を維持し続けた。1979年の死去後も数多い彼の著作は様々な言語に翻訳されて今も尚、世界中のイスラーム復興運動に対して大きな影響を与えている。

本稿の歴史的背景には、当時の植民地インド・ムスリムの政治運動における、ムスリム民族主義者の勢力拡大が挙げられるが、中でも代表的なものがムスリム連盟 Muslim League の活動である。同連盟は1937年に実施された州議会選挙で国民会議派に大敗を喫した後、失地回復に向けてムスリム大衆に対し「ヒンドゥー支配」到来の危険性を強調する路線への転換を果たした。その後連盟が様々な階層、宗派に分裂していたムスリムを一致団結させ、国民会議派に対抗し得る大衆運動を形成するために選択したイデオロギーが、インド・ムスリムはヒンドゥーとは別個の民族であり、民族自決の理念に基いて独立国家を獲得することが可能である、とする

近代西洋のナショナリズムに根差した「二民族論：(Do Qawmi Nazariya, Two nation Theory)」であり、これがムスリムの分離国家を要求する1940年3月のラーホール決議の基礎となった。マウドゥーディーはこうしたナショナリズムの概念によってインド・ムスリムが分裂する事態を招く危険性を感じ取った。彼は、歴史的・地理的・人種的要因によって形成された民族(qaum, nation, nationality)と、元来イスラームの原理原則及び集団の理念に則っているムスリムの団体(jamā‘at)、パーティー(party)、党派(hizb)との違いを明確に比較検証した。そしてムスリムは人種、血縁、地縁等を超越した世界次元の集団と定義し、その類型化を前述の用語やイスラーム共同体(ummat)という言葉で行うことで、ムスリムと民族とを同一視する論調に反対した。本文中で彼は、後に連盟を代表とするムスリム民族主義者達の唱える「ムスリム民族主義」が近代西洋の影響を受けた非イスラーム的概念である、ということをも簡潔な事例を用いて論じている。後半「解説」部においても彼は言辞矛盾を例に挙げた明晰な批判を展開している。

尚、翻訳にあたっては『民族性の問題 (Mas’ala-e Qaumīyat)』の第4版を採用した[Saiyid Abū al-A‘lā Maudūdī, *Mas’ala-e Qaumīyat*, Pathankot, 1946]。また原文中で引用されたクルアーンの章句は井筒俊彦訳『コーラン(上)(中)(下)』(岩波文庫)から引用である。ただし、井筒訳でウンマ(ummat、イスラーム共同体)を「民族」と訳出している箇所については、「ウンマ」とした。

参考文献

- (1) Jamaat-e-Islami Pakistan, Sayyid Abul A’la Maududi (1903-1979), <http://www.jamaat.the-founder.html> (May 22, 2000)
- (2) Kalim Bakadur, *The Jama’at-i-Islami of Pakistan : Political Thought and Political Action*, New Delhi, Chetana Publications, 1977.
- (3) Seyyed Vali Reza Nasr, *The Vanguard of Islamic Revolution : The Jama’at-i-Islami of Pakistan*, Berkeley, Univ of California Press, 1994 .

イスラーム民族性の真意

現代においてムスリムの団体(jamā'at)を指するのに「民族(qaum)」という言葉が広く用いられている。そしてこの用語こそが我々の集合体を示すものとして普及している。しかしクルアーン(Qur'ān)やハディース(Hadīth)においてはムスリムを指す用語として「民族」という言葉(或いはネーション(nation)の意味合いで何か別の言葉)は用いられていないのが事実である。だが一部の者達はこの言葉によって不当に利用しようとしている。そこで私は、これらの言葉に内在する真の欠陥が何であるが故に、その言葉がイスラームにおいて避けられてきたということ、これらの言葉の代わりにクルアーンやハディースでどんな言葉が用いられているかということをも簡潔に述べてみたい。これは単なる学術的議論ではない。人生における我々の行動を根底から悪化せしめた、数多い観念の誤りを明確にするものである。

「民族(qaum)」と同義である英語の「ネーション(nation)」は双方共実際には無明時代(jāhiliyat)の用語である。無明時代の民が純粋な文化的基盤(cultural basis)上に「民族性(qaumīyat : nationality)」を作り上げたことはイスラーム以前の無明時代においても、また現代の無明時代においてもない。人種の結合や歴史的伝統に対する関わりを民族性の概念を一度たりともなくすることができぬまま、彼等の精神構造には人種及び伝統的地縁への愛着が育まれているのである。古代のアラブにおいて民族という語が通常、ある人種や部族(qabīla)の人々を指すのに用いられていたように、現代でも「ネーション(nation)」の意味には共通の血統(common descent)という概念が必然的に含まれている。この概念はイスラームにおける団体の概念とは根本的に反しているため、クルアーンにおいては民族という語やその他同義のアラビア語、例えば種族(sha'ab)等はムスリムの団体(musalmānōn kī jamā'at)を指す専門用語としては用いられなかったのである。このような専門用語が、この(ムスリムの)団体のためになぜ用いられたかというのは、この集団の基盤に人種、地縁、肌の色のような、その種の要素が全く入っていなかったし、その編成及び構成は原則(uṣūl)と方針(maslak)だけを基盤に成されていた。この団体は、聖遷を行い、人種を断絶し、また地縁を放棄したことで始まったのである。こうした団体に対して一体何故に前述の用語を使用することができようか。それは明らかである。

ムスリムの団体を指してクルアーンが用いる言葉はパーティー(party)と同義の「党派(hizb)」である。民族は人種を、パーティーは原則及び方針を基盤に成立している。以上の観点によるとムスリムとは本来民族ではなく、パーティーということになる。何故なら彼等が世界全体から離れ相互に関係付けられてきたのは、一つの原則及び原理の信者ならびに信奉者であることにのみ基づいているからである。またムスリムの原則及び原理に与せぬ者達は、彼等と如何に密接な物質的關係にあるろうとも、和合する道は全くない。クルアーンは地上にただ二つのパーティーのみを見い出している。一方が「アッラーのパーティー、すなわちアッラーの党派(Hizb-e Allāh)」であり、他方が「悪魔の党派(Hizb al-Shaitān)」である。悪魔のパーティーにおいて共通の原則及び原理に関する相違点が幾つかあろうとも、クルアーンはそれらを全て一つのものと認識する。何故なら彼等の思考方法及び行動様式は如何なる場合もイスラーム的ではなく、また部分的な対立があったとしても彼等は全て悪魔の信者であることに於いて一致しているからである。クルアーンは以下のように述べている。

<彼ら、シャイターン(サタン)にすっかりとり抑えられ、そのためアッラーのことを忘れてしまった。どうせ彼らはシャイターンの一味。シャイターンの一族一党になったら、もう絶対に呼ばれるものか。>[クルアーン(以下 Q) 58(章) : 19(節)]

逆にアッラーのパーティーに属する者達は人種や故地、言語や歴史的伝統に関してお互いが如何に違いがあろうとも、また祖先同士が血腥い敵意を抱いていたとしても、神(Khudā)が仰せになられた思考方法及び生き方の下に一致すると、恰も神との関係(Īlāhī rishta: Ḥabl Allāh)によって相互に結びついたようになる。またこの新たなパーティーに足を踏み入れた時点でその者達のあらゆる関係は悪魔の党派と断絶するのである。

パーティーが対立することにより、息子が父親の遺産を相続することが不可能となるまでに父子関係は断ち切られる。ハディースによれば「二つの相異なる信仰(millat)の者は互いに相手の遺産を相続することができない」とある。

パーティーが対立することにより、それが表面化した途端、夫婦同士の交わりが禁忌となるまでに妻は夫から引き離される。ただ両者の進むべき道が分かれてしまったがためにである。クルアーンでは<あれも彼らにとって合法でなく、これも

彼らにとって合法ではない>とある。

パーティーが対立することにより、アッラーの党派に属する者は、同じ血縁集団でありながらも、悪魔の党派と関わりを持つ者との婚姻関係を結ぶことが禁じられるほどに、共同体や家族の間でも全ての社会的関係は絶たれる。クルアーンは<汝ら、邪宗徒の女を娶ることはならぬ、彼女らが信者となるまでは。信仰ある女奴隷の方が(自由身分の)邪宗徒にまさる、たとえ汝らその女がいかほど気に入っても。また汝ら、女どもも邪宗徒の男の嫁になるでないぞ、相手が信者になるまでは。信仰ある奴隷の方が、邪宗徒の男にまさる、たとえ汝らその男がいかほど気に入ろうとも。>[Q2:221]と述べている。

パーティーが対立することにより、人種の領土的民族性(nasli aur waṭanī)による関係が絶たれるだけでなく、アッラーのパーティーの原則が受け入れられない限り、絶え間ない衝突が両者の間で生じいつまでも続くのである。

<お前たちに、イブラーヒームとその一党というよい手本がある。彼らが同族にこう言った時のこと、「わしらは貴方がたと縁切りです、それからアッラーをよそにして貴方がたが崇めていらっしゃる(邪神ども)とも。わしらはもう貴方がたなぞ信じられません。わしらと貴方がたの間にはもはや敵意と憎悪あるのみ、貴方がたがアッラーだけを信仰するようになるその日まで」と、尤もあの時イブラーヒームは父親だけには、「必ず貴方のために赦しを請うてあげますよ」と言った。>[Q60:4]

<イブラーヒーム(アブラハム)が父親のために赦しを請うたのは(事実だが)、あれはただ元来そういう約束をしてあったからのこと、(父が)アッラーの敵だということが判明すると、忽ち彼は縁を切ってしまった。>[Q9:114]

パーティーが対立することにより、家族や近親間であっても親愛関係が禁じられる。仮に父親や兄弟、或いは息子達までもが悪魔の党派に属している場合、アッラーの党派に属する者がその者達を愛せば、自らの党に反旗を翻すことになるためである。クルアーンは次のように述べている。

<アッラーと最後の日を信仰するほどの者が、アッラーと使徒に楯突くような者と仲よくしているところなぞ見ることはあるまい。たとい相手がわが父、わが子、わが同族だとしても。そういう人たち(立派な信者)は、(アッラー)が信仰の二字を心の中に書き込んで、その上勿体なくも聖霊をもってしっかりと固めて下さった

人々。>[Q58:22]

パーティーと同義でクルアーンがムスリムを指して用いているもう一つの言葉が「ウンマ：ummat, イスラーム共同体」である。この語はハディースにおいても頻繁に用いられている。ある全体的な規範によって団結している集団がウンマと称される。人々の間に何らかの共通する原則が存在する場合、彼等はこの原則に則って「ウンマ」と称される。例えばある時代の人々も「ウンマ」と呼ばれる。ムスリムもある原則に基づくウンマと称されるが、その原則とは人種や領土、或いは経済上の目的ではなく、彼らの人生における使命(mission)ならびにパーティーの原則と原理である。然るにクルアーンは以下のように述べている。

<汝ら(回教徒)は今まで人種のために生まれ出た集団の中で最上のもの。汝らは義しいことを勧め、いけないことを止めさせようとし、アッラーを信仰する。>[Q2:143]

<かくて我(アッラー)は汝ら(回教徒)を(諸民族の)真中の民族とした。汝らをしてすべての人々の証人と成し、かつこの使徒(マホメット)をして汝らの証人となさんがために。>[Q2:143]

これらの章を熟考されたい。「真中のウンマ (biċ kī ummat)」には「ムスリム (musalmān)」が国際的団体(bain al-Aqwāmī Jamā'at : international party)の名称であるとの意が込められている。そこでは独自の原則を受け入れ、独自のプログラム(program)を実行し、独自の使命を果たす意向を持つ者達が世界中の全民族から選出されている。これらの人々は各々の民族の出身であり、一つのパーティーを作り上げた後にいずれの民族との関係をも絶つのである。だからこそこれが真中のウンマなのである。しかし各々の民族との関係を絶った後、今度はあらゆる民族との新たな関係が樹立される。それはこのウンマが、地上において神の法の執行官(khudā'ī faujdār)としての義務を履行するということである。「汝らをしてすべての人々の証人となし」との箇所は、ムスリムが神(khudā)から、地上における法の執行官に任じられたことを述べており、「そして汝らは人種のために選ばれしもの」とのくだりは、ムスリムの使命が全世界的次元のものであることを明確に表している。この使命とは要するに、「アッラーの党派」の指導者(leader)たる預言者ムハンマドに神が授けた思想及び行動の規範を、あらゆる知力や財力をもってして地上に普及させ、且つこの規範に反する様式全てを制圧することである。以上を基盤にムスリ

ムは一つのウンマを確立したのである。

ムスリムの集合体を表現するために預言者が頻繁に用いた第三の言葉が「団体(jamā'at)」である。「党派(hizb)」と同様にこの語もパーティー(party)と同義のものである。数多くのハディースに注目することによって、預言者が「民族(qaum)」や「種族(sha'ab)」、もしくはこれらと同義である言葉の使用を意図的に回避し、その代わりに「団体」という言葉を用いておられたことが推察される。預言者は「常に民族と共にあれ」とか「民族に神の御手が差し伸べられる」とは一度も述べず、自ら団体という語を事有る毎に用いておられた。これこそ、ムスリムの集合体の特徴を表現するには「民族」ではなく、団体や党派、或いはパーティーといった語がより適切である理由であり、また事実その通りなのである。民族という語が通常用いられる意味からすると、ある人物が如何なる原理や原則の信奉者であろうとも、その民族の中に生を受け、また名前や生活様式、社会的関係においてその民族に属していれば、その一員として加わり続けることができる。しかしパーティーや団体、さらに党派といった語が用いられる意味からすると、パーティーへの加入や離脱はただ原則と原理次第なのである。あなた達はパーティーの原則及び方針から離れると、決してそれに加わることはできないし、その名を利用することも不可能なのである。ましてその代表者には成り得ないし、その利益の保護者となって登場することも、またパーティーのメンバーから何らかの協力を得ることもできない。仮にあなたが「私はパーティーの原則及び方針に賛同しない。だが私の父はこのパーティーのメンバーだし、私の名前もメンバー達のもので似通っている。したがって私にもメンバーの権利が与えられるべきである」などと言えば、あなたのこうした論理を聞く側はおそらく、気でもふれ始めたかと嘲笑することであろう。しかしパーティーの概念を民族の概念へと転換してみるがいい、するとこうした全ての行動が起り得るのである。

イスラームはその国際的パーティーの構成員(arkān)間の団結と社会生活における平等を生み出すため、また彼らに一つの社会(society)を築き上げさせるため相互に婚姻関係を結ぶよう命じた。さらにその子孫に対しては、彼らが自発的にパーティーの原則及び方針の信奉者となり、布教(tablīgh)と共に血縁の拡大によってもパーティーの力が増大するという教えが確立されたのである。これこそこのパー

ティーが民族となる端緒であり、後に共同社会、血縁関係並びに歴史的伝統によってこの民族性が非常に強固なものへと築き上げられたのである。

以上のような経緯に間違いはない。しかしムスリムは徐々に、本来自分達が一つのパーティーであり、またパーティーたる地位にこそ自らの民族性の基盤が置かれているという事実を忘却の彼方へと追いやってしまったのである。この忘却が深まるにつれて現在では、パーティーの観念が民族性の観念に埋没するまでに至ってしまっている。今やムスリムは単なる一つの民族と成り果ててしまっているのである。それはドイツ人が一つの民族であり、日本人も一つの民族である、さらにイギリス人も一つの民族であるといったことと同類の民族である。イスラームが彼らを一つのウンマへと築き上げる上では原則及び方針こそが本質的なものであるということや、イスラームがある使命を達成するために信徒を一つのパーティーに組織化させたということを彼らは忘れてしまっているのだ。これらを忘れて彼等は非ムスリムから「民族性(qaumīyat)」の誤った観念を受け入れてたのである。これは根本的な誤りである。この悪影響は、その誤りが排除されない限り、イスラーム復興(ahyā-e Islām)に向けての第一歩を踏み出すことすら不可能なまでに拡大してしまっているのである。

あるパーティーの構成員間における相愛、協和、互助は何れも個人的、或いは親族的立場からではなく、彼等全員が一つの原則を信奉し、一つの方針に追従することに基いている。パーティーの一員が仮にその団体の原則と方針から離れて何らかの行動を起こす場合、単にその者への援助がパーティーの構成員の義務でなくなるだけではない。それとは反対に裏切り行為に出るのを阻止すること、(訳注：メンバーからの忠告を)受け入れない場合はその者に対して団体の規約(jamā'atī zawābiṭ)に基づいた厳正なる処置をとると、それでもなお受け入れない場合は団体から追放することが、その者に対してメンバーが負う義務となる。パーティーの方針を断固として拒否した人物が肅正される例もまた世界中で枚挙に暇がない。(原注：イスラームにおける背教に対する死の根拠がこれである。ソヴィエト連邦でも社会主義の放棄はこうした同罰に処せられる。)しかしムスリムの現状をご覧になるがいい。彼らは自らをパーティーではなく民族と認識するがために如何に過った認識に囚われてしまっていることか。あるいは私利私欲のために非イスラーム的原則

に基づいた行動をし、それへの支援を得よう他のムスリム対し期待する者もある。仮に支援を得ることができなければ「ああ、ムスリムがムスリムの役に立たないとは」などと愚痴をこぼす。推薦する者は、自らの推薦を「ムスリムの仲間にとって良いことである。彼を支援しよう」といった言葉で彼等に働きかける。支援する者もまた、彼を支援すれば自らの行動はイスラーム的同情(Islāmī hamdardī)であると称す。こうした事例全てにおいて各々の言葉にイスラーム的同情、イスラーム的同胞(Islāmī birādārī)、イスラーム的宗教関係(Islāmī rishta-e dīn)といった名称が幾度となく用いられる。実際にはイスラームに反する行為をしているにも拘わらず、自らイスラームに言及したり、その名を語ることによって同情を求めたり同情したりすることは明らかに意味を成さない。こうした輩が語るイスラームが彼等の内面に仮にも本当に宿っているなら、イスラームの団体(Islāmī jamā'at)のメンバーがイスラーム的理念(Islāmī nazāriyya)に反した行動をとっていると知られた時には、すぐさまこうした違反者達に対応できるようにし、彼等を悔い改めさせるべきである。何らかの支援を求めるなどは論外だが、生きたイスラーム社会(Islāmī society)においては、如何なる人物もイスラームの原則の反対者などと名乗ることは不可能である。しかしあなた達の住む社会では日夜こうした事態が起きており、あなた達の内面で無知なる民族性が生じたからに他ならない。あなた達がイスラームの同胞愛(ikhwat)と呼ぶものは実際のところ、非ムスリムから取り入れた、無知なる民族性の親近感に過ぎないのである。

この無知から生まれる奇妙な現象として、貴方達の内面に「民族的利益 (qaumī mafād)」という奇妙な観念が生じ、また臆面もなくそれを「イスラーム的利益(Islāmī mafād)」とも述べていることがある。この名ばかりのイスラーム的利益、或いは民族的利益とは一体如何なるものなのであろうか。それは自らを「ムスリム(musalmān)」と呼ぶ人々がより幸福になることであり、富を得、尊敬も増し、権力を獲得することである。ただし、これら全ての利益がイスラーム的理念とイスラームの原則に従っているか、或いは反しているかといった観点には関係ない。思考方法及び行動形態にイスラーム的な属性が全く認められなくとも、生まれがムスリムである者、或いは家族がムスリムである者をあなた達は「ムスリム」と呼ぶ。それは恰もあなた達にとってムスリムとは精神ではなく肉体の呼称であり、またイスラーム的属性

(şifāt-e Islām)から乖離した見解を持つ人物をムスリムと呼ぶことも可能となることなのである。こうした誤った概念によってあなた達は、そのような肉体を持つ者たちをムスリムと呼び、彼らの政権をイスラーム政権(Islāmī ḥukūmat)、そしてその発展をイスラームの発展(Islāmī taraqqī)、その利益をイスラームの利益だとあなた達は断定している。このような政権、進歩及び利益がイスラームの原則に全く叶っていないことなど気にも留めていないのだ。ドイツ民族性(Jarmanīyat)が何らかの原則の名称でなく、単なる民族性の名称に過ぎないように、またドイツ民族主義者(Jarman qaum parast)が、たとえ如何なる方法であれ、ただ単にドイツ人の栄光を求めているのと同様に、あなた達も「ムスリム性」(muslimīyat)を単なるムスリム民族主義者(Musalman qaum parast)という民族性(qaumīyat)の一つにしてしまったのである。また貴方達が言うムスリム民族主義者とは単に自らの民族の栄光を欲しているに過ぎず、こうした栄光が原則面及び行動面でイスラームに全く反した様式に追従した結果であったとしても構わないのである。これが無知(jāhiliyat)でなくて何であろうか。実際のところあなた達は、ムスリムが地上における人種の繁栄と福祉に向けて独自の理念(nazarīya)と行動プログラム('amalī program)を掲げた国際的なパーティーの名称であったことをお忘れではないのか。この理念とプログラムを切り離した挙げ句、個人レベルであれ集団レベルであれ理念やプログラムに基づいて行動する人々のなすことを、あなた達はどのように「イスラーム的」と呼ぶことができるのか。資本主義の原則に基づいて行動する人物を社会主義者と呼ぶなど耳にしたことがおありか。資本主義政権を社会主義政権とでもおっしゃるのか。ファシスト体制を民主体制呼ばわりするとでも申されるのか。仮にある人物が以上の如き用語を不正に用いるのであれば、その者を無知並びに愚か者呼ばわりするのにあなた達も何の躊躇もされないことだろう。しかしここで我々が目の当たりにしているのはイスラーム及びムスリムという用語が全く不正に用いられており、その事実が無知であるとの気配すら自覚されていないということなのである。

ムスリム(musalman)という語は、それが「出自を示す品詞 ism-e dhāt」(普通名詞)ではなく「属性を示す品詞 ism-e šifāt」(形容詞)であるということを、その語自らが明らかにしている。また「イスラームに帰依する者(pairū-e Islām)」以外にムスリムという語を示す意味は他に毛頭たりとも存在しない。これは人間の独自の知的、倫

理的及び行動的な属性を明らかにする語であり、その名称が「イスラーム」なのである。したがってあなた達が「ヒンドゥーの人(shakḥṣ-e Hindū)」や「日本の人(shakḥṣ-e Jāpānī)」、或いは「中国の人(shakḥṣ-e Īnī)」に対してヒンドゥー教徒 Hindū や日本人 Jāpānī、或いは中国人 Īnī という語を用いるのと同様に、この語をムスリムである人間に対して用いることは不可能である。ムスリムであるかのような名を持つ者であっても、イスラームの原則を放棄した時点で、ムスリムとしての資格を自ら放棄するのである。そのあとに何かをする場合には個人として行動することとなるのだ。[訳注：かかる人物には] イスラームの名を用いる権利は全くない。同様に「ムスリムの利益」、「ムスリムの発展」、「ムスリムの政権及び国家」、「ムスリムの大臣」、「ムスリムの組織」以下その他の言葉をムスリムは、これらがイスラーム理念及びイスラームの原則に準じ、且つイスラームが課す使命の遂行に関連する場合にのみ述べることができる。さもなければこれらのうち如何なるものにもムスリムという語を用いるのは不正となる。あなた達は彼らをお好きなように別の名をつけられるがよろしかろう、とにかく、ムスリムの名を冠することはできないのだ。何故ならムスリムとはイスラームの属性から離れると何物でもなくなってしまうからである。社会主義からかけ離れた見解をしながらもある人物や国民(qaum)の名称が社会主義的とされることや、同様に(社会主義とは別の)何らかの利益が社会主義的利益と呼ばれたり、その政府や組織を、社会主義政権や社会主義的組織と呼ぶこと、あるいはその発展を社会主義的發展と称することをあなた達は想像すらできない筈である。では一体ムスリムに関して、イスラームから全く離れても、「ムスリム」という語が、ある人物や民族に固有の名称であると考え、全ての物事がイスラーム的と称され得るなどと何故理解しているのか。

こうした誤った認識は、自らの文化や文明、及び歴史に関するあなた達の姿勢を根本から誤らせるものである。イスラームの原則に反して成立した王朝や政権の数々をあなた達は、ただそれらに君臨した者がムスリムであったというだけで「イスラーム政権」と言っている。コルドバやバグダード、またデリーやカイロ等の享楽主義的な王朝で育まれた文明をあなた達は、これらがイスラームと無関係であるにも拘わらず「イスラーム文明(Islāmī tamaddun)」と称している。あなた達がイスラーム文化(Islāmī tahdhīb)に関する質問を受けた場合、恰もこれがイスラーム文化

最高の証であるかの如く、即座にアーグラのタージ・マハルを取り上げる。イスラーム文明とは本来、亡骸一体を埋葬するのに何エーカーもの土地を確保し、またそれに莫大な金銭を投じて廟を建設するようなものではないのである。イスラーム史の栄光について述べる場合、あなた達はアッバース朝、セルジューク朝、ムガル朝等の功績を挙げる。実際のところイスラーム史の観点からは、それらの大半が黄金の水によってではなく、黒インクによって犯罪の数々を挙げた目録に記載されるべきでなのである。あなた達はムスリムの諸王の歴史に「イスラーム史 (Islāmī tārikh)」との名称を与えているが、恰もこれらの諸王の名そのものがイスラームであるかの如く「イスラームの歴史 (Tārikh-e Islām)」との呼称まで授けている。あなた達はイスラームの使命とその原則及び理念を念頭に置いて我々の過去の歴史を評価することなく、また完全な公正をもってイスラーム的行為を非イスラームのそれと区別して見ることも示すこともない。ムスリム支配者を支持および擁護することがイスラーム史に貢献することであるとあなた達は理解している。ムスリムに関わる全ての事象を「イスラーム的」と単に認識してしまうがため、あなた達の見解にこうした邪さが生ずるのである。そこであなた達は、ムスリムと称する者が非ムスリム的な様式で行動しても、その行為をムスリムの行動と言っても良いと考えているのである。

以上の屈折した見解をあなた達は自国の政治においても抱いている。イスラームの原則及びイデオロギー、その使命から乖離した見解のもとに、あなた達はある民族を「ムスリム民族 (muslim qaum)」との名称記憶している。そしてこの民族の命令であるとか、その民族の名の下にとか、あるいはその民族そのもののためという大義名分で、あらゆる人物やグループが思いのままに行動を起こすことが可能となっている。あなた達は、その人物が「ムスリムの民族 (Musalmānoḥ kī qaum)」に属していれば、イスラームに関して全く無知であろうが、ムスリムの代表どころか、指導者にもなれると考えているのだ。あなた達は、自らが追従することで何らかの利益を得られるのではないかと見込んで、その使命がイスラームとは如何に異なっているように、そのパーティーに歩み寄る魂胆でいる。ムスリムが僅かばかりの食事にありつくような制度が整備されれば、あなた達はそれがイスラームの観点では禁忌の食事であっても満足する。何処かの非ムスリムが、非イスラーム的な目的のた

めに行使するように権力を振ろうとしても、そのムスリムが権力の座にいているのを見て、あなた達はことのほか御満悦となる。あなた達は本来完全に非イスラーム的である大抵の事象にイスラームの利益という名称を与え、イスラームの原則に全く反して樹立された制度の支持および保全のみに尽力し、さらに決してイスラーム的ではない目的のために自らの金銭や民族の力を浪費している。以上の結果の全てはあなた達が自らを単なる一つの「民族」と認識するという根本的な誤謬によるものである。またあなた達は自分たちが「国際的なパーティー」であるという事実を忘れてしまっている。そのいかなる利益も目的も、自らのパーティーの原則を世界において支配的たらしめること以外にないのである。あなた達が御自分の内面で民族の代わりにパーティーの概念を生み出さず、またそれを活性化しない限り、人生の何事においてもあなた達の行動は正しいものとはならないであろう。(『クルアーン注釈(Tarjumān al-Qur'ān)』ヒジュラ暦1358年サファル月(西暦1939年4月)号)

解説

本稿の出版後に様々な方面から「イスラーム団体(Islāmī Jamā'at)」を「民族(qaum)」ではなく「パーティー(party)」と称することによって、それがある特定の領土的民族の一部を成すという事態が生じ得るのではないかと、との疑問が寄せられた。ある民族の中で様々な政党が存在し、各々が各自の方針に基づいているにも拘わらず、すべて「民族」と称される集合体(majmū'a)に加わっているこのように、仮にムスリムが一つのパーティーであるならば、ムスリムも祖国(waṭan)の民族の一部となることが可能である。

団体やパーティーといった言葉の人々は通常、政党もしくは政治団体 (siyāsī political party)の意味で用いるために以上の如き誤解を抱いてしまったのである。しかしそれはこの語の本来的な理解ではなく、特殊な意味で広く用いられているために生じた誤解でしかない。つまり独自の信条、理念、方針及び目的の下に集結した人々、それが団体(jamā'at)であるというのがこの語に対する真の意味である。ク

ルアーンは「党派(hizb)」や「イスラーム共同体(ummat)」といった言葉をこの意味に用いている。「団体」の語は数々のハディースにおいても用いられているが、「パーティー」もまさにその同義なのである。

今日「団体」の中にはまだ以下のようなものがある。一つは、ある民族や国家(mulk)独自の状況に関し、ある政策について特定の理念やプログラムを持つものを指すのである。この種の団体は単なる政治団体に過ぎない。故にこの団体はそれが誕生した民族の一部分を構成して活動することができ、またそうしている。

これに対しもう一つの団体とは以下のようなものである。つまり全体的イデオロギー世界と観念(jahānī taṣavvur: world idea)を携えて結成され、全人種のために(民族とか領土といった観念を排して)普遍的な一つの方針を打ち出し、生活全般の形成を新たな方式に基づいて実践することを狙いとし、理念及び方針、信条及び思想、倫理の原則から個人の処遇から社会制度の細部に至るまで、あらゆる事象を自らの枠組みに当てはめようとし、確固たる文化及び独自の文明(tamaddun : civillization)を実現する意志を抱くものである。こうした団体も実際に一個の団体ではあるが、ある民族の一部分を構成して活動ができる類の団体ではない。これは限定された民族性を遥かに凌駕したものであり、世界中で様々な民族性を作り上げている人種的及び伝統的偏見を打破することを目指すものである。それでもこの団体が以上の如き民族性に関連していると言えようか。この団体は人種的及び歴史的民族性ではなく、理性的民族性('aqlī qaumīyat: rational nationality)というものを構築する。固定的民族性ではなく拡張的民族性(expanding nationality)ができる。この拡張的民族性は、知的並びに文化的統一を基盤として地上の全ての人々をとり込もうとする民族性となるのである。しかしこれが一つの民族性となっているにも拘わらず、実際には一団体に過ぎないのである。何故ならこの団体に加入するには出自ではなく、この団体が形成される基盤となる理念及び方針の信奉者であることによるからである。

ムスリムとは本来こうした二番目の団体の名称である。一つの民族の中で構成される多くの団体のようなものではなく、確固たる文明制度 (nizām-e tahdīb o tamaddun : civillization)を築き上げるべく誕生し、微々たる民族性の狭小な境界を打破し、理性的基盤に基づいて壮大な世界次元の民族性 (jahānī qaumīyat : world

nationality)を築き上げようとするパーティーなのである。これを「民族」と称することは以下の観点から確かに正しいことであろう。つまりムスリム自身は自らを世界の人種的及び歴史的民族性のうちのどの民族性と信頼関係を結ぼうとせず、自らの人生観と社会哲学(falsafah-e-ijtimā'ī: social philosophy)に従って独自の文明を創造しているからである。しかしこの観点から「民族」であるにも拘わらず、ムスリムは実際には「団体」なのである。何故ならただ偶然に生まれたということ(mahẓ ittifaqī paidā'ish: mere accident of birth)だけでは、その目標を確信し、信奉しない限り、如何なる人物をもこの民族の一員となることはできないからである。同様に、他の民族に生まれたとしても、この国体の方針を信奉すれば、その者が自らの民族を離脱してこの団体に加入することを禁じることにできないのだ。以上私が述べてきたことの意味は実際のところ、ムスリム民族の民族性とはそれが一つの団体、もしくはパーティーであることを基盤に確立されている、ということなのである。団体であることが根源であり、民族であることは枝葉に過ぎない。団体あることから離れて、ただ単に一つの民族となってしまうと、それは墮落(tanazzul: degeneration)でしかない。

実際に人間社会の歴史においてイスラーム団体の地位は非常に独特のものである。イスラーム以前には仏教やキリスト教が民族性の限界を打破してあらゆる人間世界に対して説法を行い、一つの理念・方針を基盤に世界的共同体を築くよう尽力した。しかし双方共に幾つかの倫理原則を除き何らかの社会哲学つまりそれを基盤として普遍的な文明制度を構築することが可能な社会哲学を持ち合わせていなかった。よって双方が世界的な民族性を創造することはできず、同胞関係(birādarī: brotherhood)の一種を築くに留まった。イスラームが誕生した後、西洋の科学文明(scientific tahdhīb)が起り、その主張を国際的なものにしようと試みたが、発祥以来そこにはナショナリズム(nationalism)の亡霊が憑きまどっている。したがって西洋科学文明でさえも世界的な民族性の創造には成功していない。目下マルクス社会主義が台頭しており、民族性の限界を打破して世界観に基づく普遍的な文明の実現を目指している。しかし現時点では社会主義が目標としている新たな文明を完全な形で実現するには至っていない。よってマルクス主義でさえこれまで世界的な民族性に転換することができていない。(原注:それどころか現在マルクス主義

自身、その内面でナショナリズムの病理に蝕まれている。スターリンと彼の行動様式においてロシア民族主義(Rūsī qaum parastī)の感情が日々高まりつつある。ロシア社会主義文献には、1936年度政府綱領にも所々に「父祖の地」との記述が見られるほどである。しかしイスラームに視点を転ずるとあらゆる箇所に「イスラームの地(dār al-Islām)」との語が使用されており、「父祖の地」や「母なる地」は全く用いられていない。)人種的並びに歴史的民族性を打破して文明的基盤上に世界的な民族性を作る理念・方針は、地上においてはイスラームのみが存在する。故にイスラームの精神に通じていない人々にとっては、一つの社会的形態が如何にして民族でありかつ同時にパーティーでもあり得るのか、理解し難いのである。彼等がこの世に認識している民族の中で、構成員がその民族に生まれたのではなく、自らなるというものはないのだ。イタリア人として生まれた者はイタリア民族の一員であり、イタリア人として生まれなかった者は如何にしてもイタリア人(民族)にはなり得ないと彼等は見なす。人間が信条と方針に基づいて加入する、またそれらを変更することによって離脱するような民族性に彼等は通じていない。彼等にとってこの資質は民族的なものでなく、党派的なものであろう。しかしこうした唯一無二の党派が独自の文明を築き、独自の確固たる民族性を宣言し、如何なる地においてもその地の民族性と自分達自身を関連付けようとしないことを目の当たりにすると、彼等にとってこれは謎めいたものに映る。

まさにこのような無理解が非ムスリムと同様にムスリムにも見られるようになっている。長期間に亘って非イスラーム的教育を受け、また非イスラーム的環境で過ごしてきたせいで彼等の内面に潜む「歴史的民族性」なる無知な観念が生じてしまったのである。彼らは以下のことを忘れてしまっている。つまり我々本来の立場とは、この世において世界的な革命を起こすべく誕生した団体であり、自らの理念をこの世に広めることを人生の目標とし、その活動はこの世の誤った社会の諸制度を断固粉碎して自らの社会哲学を基盤に一つの社会制度を編成することであった。これら全てを忘れ切って彼等は自らを、雑多に存在している民族の一つと認識している。今日こうした輩の集会や会合において、会議や団体において、またその新聞や機関誌等ありとあらゆる場において、全世界の諸民族から離れて一つのウンマが築き上げられたという彼等の社会生活における使命が語られることはない。この

使命の代わりに「ムスリムの利益」が今日彼等の全注目を集めている。……ムスリムとはムスリムを父母とした血筋から生まれた全ての人々のことである。そして利益とはこうした血縁上ムスリムである者の物質的ならびに政治的利益のことである。また究極的には祖先から受け継いだ文化の保護である。……また、イタリア人にとっての利益に見合う全ての方法をムッソリーニが選択しているのと全く同様に、こうした利益の保護や発展のための施策に馳せ参じている。如何なる原則や理念にもムッソリーニは拘束されないし、これらのムスリムも同様である。イタリア人のために有益であるものは正当であるとムッソリーニは述べる。こちらでも「ムスリム」にとって有益であるものが正当だと言っているのである。これこそ私がムスリムの墮落と述べていることであり、こうした墮落に抵抗すべく私は以下のことを想起させる必要性を感じている。つまり諸君は人種的・歴史的民族の如き民族ではなく、実際には一つの団体なのである。また諸君が救済されるのはひとえに自分自身の党派意識(jamā'ati eḥsās : party sense)を芽生えさせることにかかっているのだ。

こうした党派意識の欠如、もしくは無自覚による悪い結果は数え切れないほど多い。これらの無分別及び無自覚の結果によって、イスラームのイデオロギーやその目的、原則とかけ離れているようとも誰の後でもついて行き、ありとあらゆる理念や方針を信奉する。民族主義者(nationalist)にもなり得るし、共産主義者(communist)にもなり得る。ファシストの原則を承認することさえ何の躊躇もしない。西洋の様々な社会哲学、形而上学的思想や学術理論に摺り寄って各々を信奉しているムスリムにあなた達は出くわすことだろう。世界の如何なる政治、社会、或いは文化活動にもムスリムが加わっていないことがないのである。さらに滑稽であるのは、こうした輩が全て自らをムスリムと称し、ムスリムであると認識し、さらにムスリムであると認知されていることである。以上の如く様々な道で、彷徨したり突っ走ったりしている輩の中で、「ムスリム」とは生来の名称ではなく、イスラームの道を歩む者を指す、属性を示す品詞であると想起する者があろうか。イスラームの道から逸脱して他の道を歩む人物をムスリムと称することは全く誤った言葉の使い方である。ムスリム民族主義者やムスリム共産主義者以下この種の用語は、「共産主義の金貸し」や「仏教徒の屠殺人」という用語と同様に言辞矛盾の用語なのである。

(『クルアーン解釈(*Tarjumān al-Qurān*)』)ヒジュラ暦1358年ラビー・アッサーニ一月
(西暦1939年6月)号)